読書推進運動

No.696

★2026「若い人に贈る読書のすすめ」書目一覧（2頁）
★「能登の置き本」プロジェクト レポート（6・7頁）

定価60円　会員の購読料は会費の中に含まれる

公益社団法人
読書推進運動協議会
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町1-32
出版クラブビル6階
TEL　03(5244)5270
FAX　03(5244)5271
発行人　佐々木　泰
編集人　片岡　伸子

「若い人に贈る読書のすすめ」によせて

本の星が輝く空へ「夜間飛行」

フランス文学者
放送大学 教授・東京大学 名誉教授
野崎（のざき） 歓（かん）

よく、「古典」を読めと言われますが、古典とはいったいなんでしょう。単に古い本というだけではないはずです。

昔読んだときにはぴんとこなかったのに、年を取ってから読んでみたらびっくりするほどおもしろい。あるいはまた、昔愛読した本だけれど、ひさしぶりに読み返したら以前とはまったく違う新鮮さがあった。

そうやっていつしか人生の友となってくれる本が、真の古典ではないでしょうか。

具体例でお話ししましょう。『星の王子さま』の作者として有名なサン＝テグジュペリは、それ以外にも素晴らしい作品を書いています。『夜間飛行』という小説。そして『人間の大地』という、エッセイであり、物語であり、思想書でもあるような本。これら二作がまさに古典の名に値することを僕は〝発見〟しました。

きっかけはコロナ禍でした。それまでの日常が一変したあのつらい時期。暗鬱とした気分になりました。ふと、試練に負けない人間の物語を読みたくなって、『夜間飛行』の仏語原書を手に取ったのです。ざっと20年ぶりの再読でした。

飛行機が発明されてまださほど時間が経っていないころ、航路の開拓は命がけの仕事でした。パイオニア的使命感を抱いて空を飛んだひとりがサン＝テグジュペリなのです。彼はその体験をもとに、夜の飛行に挑む者たちの姿を『夜間飛行』に描き出しました。

草創期の飛行機乗りは、のちの宇宙飛行士に匹敵する圧倒的な孤独と、そして神秘を味わっていました。暗黒の彼方、星々や月の間近まで飛んでいくような体験の眩惑と、そこで直面する危険を、彼は鮮烈に綴っています。

かつての僕は、それを自分には縁のない非日常的な冒険として読んでいました。ところが今回は肌身に迫るリアルな内容だと感じられたのです。

驚いた僕は、『人間の大地』も久方ぶりに再読してみました。飛行機乗りの物語という点では『夜間飛行』の続編をなしています。

砂漠に墜落して、炎天下、食べ物も水もない。そんな著者自身の経験を伝える文章のなんという迫真力。彼はそこから人生への教訓を得るとともに、現代社会に厳しい批判の目を向けます。以前はそのくだりがちょっと教訓調で、煙たく思えたのです。

だがウィルス蔓延下、命の大切さと連帯の尊さを痛感させられたせいか、その部分も胸にしみる思いがしました。九死に一生を得た作者は、対立と分断に覆われた西洋諸国に憤って叫びます。「同じ惑星によって運ばれ、同じ船の乗組員である」というのに「われわれはなぜ憎みあうのか？」

これは1939年に出版された本ですが、現代の人間に直接訴えかけてくるようではありませんか。そのことばを新たな読者に手渡したい。そう願い二作を翻訳しました。

拙訳の宣伝をしたいわけではありません。そんなふうに時空を超えて輝き続ける作品が、この世には天の星ほど数多く存在します。一冊の古典に夢中で読みふけるのはなんという幸福でしょう。そのとき私たちは、自分が巨大な遺産を受け継いでいることを心から実感できるのです。

2026『若い人に贈る読書のすすめ』実施

公益社団法人 読書推進運動協議会・事業委員会は、2026「若い人に贈る読書のすすめ」推薦図書24点を選定しました。

今年も例年どおり、道府県読書推進運動協議会に「若い人にぜひ読んでもらいたい本」の推薦を依頼、40の読進協から計93点の書目の推薦をいただきました。

もっとも推薦が多かったのは、鈴木俊貴の『僕には鳥の言葉がわかる』で、5つの読進協から推薦がありました。ついで前田安正の『AIに書けない文章を書く』が4つの読進協から推薦がありました。読書猿の『ゼロからの読書教室』、原田ひ香の『月収』、キリーロバ・ナージャの『ロールモデルがいない君へ』への推薦も多くありました。

事業委員会の書目選考基準は、①各出版社1点 ②複数県推薦書目の検討 ③対象読者向きか ④そのほか各委員が特別に推薦したい書目などを勘案して検討。メールでの投票と意見交換を行い、最終的に委員会全体で24点を確認、決定いたしました。

本年度も、この推薦図書リーフレットを18万5000部製作、道府県の読進協・都道府県立図書館を通じて各公共図書館に、日本出版取次協会の協力で取次会社を通じて全国の書店に配布を行い、有効に活用していただく予定です。

リーフレットの出来は12月上旬を予定。2025年内の発送は12月22日(月)受付分までです。成人式でご利用予定の方はご注意を。卒業式、読書グループ、学校での読書指導、地域の文化活動などでのご利用も歓迎です（部数にかぎりがあります）。ご希望の方は公益社団法人 読書推進運動協議会事務局までお問いあわせください。

☎03－5244－5270
e-mail info@dokusyo.or.jp

「若い人に贈る読書のすすめ」リーフレット掲載書名一覧

著者名	書名	定価	出版社
野崎 まど	小説	二一四五	講談社
塩田 武士	踊りつかれて	二四二〇	文藝春秋
古賀 及子	好きな食べ物がみつからない	一七六〇	ポプラ社
前田 安正	AIに書けない文章を書く	九四六	筑摩書房
今村 翔吾	運命を変えるチャンスはなぜか突然やって来る	一五九五	岩波書店
鈴木 俊貴	僕には鳥の言葉がわかる	一八七〇	小学館
宇井 彩野	愛ちゃんのモテる人生	一八四八	河出書房新社
窪 美澄	給水塔から見た虹は	二〇九〇	集英社
キリーロバ・ナージャ	ロールモデルがいない君へ	一八七〇	KADOKAWA
今村 翔吾	人よ、花よ、（上・下）	二三一〇（上） 二二〇〇（下）	朝日新聞出版
岡野 民	あの時のわたし	二二〇〇	新潮社
林 健太郎	「ごめんなさい」の練習	一六五〇	PHP研究所
浅倉 秋成	まず良識をみじん切りにします	一七六〇	光文社
宮下 芳明	13歳から挑むフロンティア思考	一九八〇	日経BP
白尾 悠	隣人のうたはうるさくて、ときどきやさしい	一八七〇	双葉社
読書猿	苦手な読書が好きになる！ ゼロからの読書教室	一七六〇	NHK出版
原田 ひ香	月収	一八七〇	中央公論新社
額賀 澪	願わくば海の底で	一七六〇	東京創元社
サヘル・ローズ	これから大人になるアナタに伝えたい10のこと	一六五〇	童心社
東山 一悟	投資で2億稼いだ社畜のぼくが15歳の娘に伝えたい29の真実	一七六〇	JTBパブリッシング
岡田 憲治	言いたいことが言えないひとの政治学	一九八〇	晶文社
利根川 裕	あらすじと写真でわかる！ はじめての歌舞伎	一九八〇	世界文化社
びーやま 高田ふーみん	17歳のときに知りたかった受験のこと、人生のこと。	一六五〇	ダイヤモンド社
泉 賢太郎 死後くん	大学4年間を「応援」に捧げた私が古生物学者になった話	一五四〇	理論社

2025年度・第58回 全国優良読書グループ表彰

――道府県読進協推薦――

公益社団法人 読書推進運動協議会では、第79回「読書週間」事業として、11月3日㈷を中心に、各道府県の読書推進運動協議会を通じて、「第58回 全国優良読書グループ（下表）」の表彰を行いました（一部選考中）。

読書グループの結成促進と育成強化は、読書推進運動の根幹をなすものとして、公益社団法人 読書推進運動協議会は結成以来、活動の第一目標とし、道府県各読書推進運動協議会と連携して、その育成・発展に努力を重ねています。

この事業は、各読書推進運動協議会の推薦により、一地域一グループを表彰するもので、原則として5年以上の活動を続けているグループを推薦・表彰の対象としています。

現在、読書グループの活動は、読書会、実演活動、家庭・地域文庫、障がいを持つ方への読書支援、図書館サポートなど、多岐にわたっています。

全国の読書グループに敬意を表し、数ある読書グループを対象に、ご推薦の労をとられた、各道府県読書推進運動協議会のみなさまに、深く感謝いたします。

優良読書グループ名	所在地	代表者（世話人）名
おはなしさんた恵夢	北海道恵庭市	内倉 真裕美
むつ市交通安全みんなの会連合会	青森県むつ市	山道 千代
イエローチャーム	岩手県北上市	伊藤 宣子
十二支会	宮城県仙台市	鵜飼 信好
読み語りボランティア「やまがっこう」	秋田県由利本荘市	佐藤 留美子
ゆりかごの会	福島県福島市	中西 郁子
図書ボランティアの会	茨城県結城市	稲葉 里子
ゆうきおはなし会	栃木県塩谷郡塩谷町	福田 桂子
びいどろや	群馬県太田市	中野 きよ枝
太田市美術館・図書館「ウーフ」	埼玉県幸手市	久保田 清子
本の輪	千葉県袖ケ浦市	小林 君代
朗読サークル「萌」	新潟県魚沼市	大平 光代
絵本の家「ゆきぼうし」	富山県射水市	羽廣 嘉一
文章サロン	石川県羽咋郡志賀町	蔵谷 紀雄
新あかね（志賀町読書会連絡協議会）	山梨県甲斐市	長田 明美
甲斐市立敷島図書館ボランティア	長野県佐久市	常田 豊子
人形劇サークル うふふ	岐阜県多治見市	松田 幸子
佐久市立中央図書館 音の会	静岡県富士市	狩野 窪高江
絵本案内人ボランティア	京都府亀岡市	疋田 百恵
富士市学校読み聞かせネットワーク	兵庫県多可郡多可町	遠藤 ひとみ
詳徳小おはなしの会ひまわり	和歌山県新宮市	谷中 きよ子
おはなしサークル「あいあい」	島根県邑智郡邑南町	高橋 文子
おはなしの玉手箱	岡山県岡山市	村木 陽子
おはなし会トムテ	広島県	
はなみずき	徳島県海部郡美波町	小山 万寿美
（選考中）	香川県さぬき市	金岡 エミ子
ひわさおはなしクラブ	高知県高知市	山本 典判
お話ボランティア「野の花」	福岡県みやま市	大田黒 初枝
語りと紙芝居の会	佐賀県佐賀市	古川 和
与田準一記念館運営ボランティア	長崎県諫早市	吉賀 裕子
ろんぐらんぐ	熊本県天草市	山崎 あさみ
赤松小親と子の読書会「赤ずきんの会」	大分県中津市	及川 花子
絵本の病院 ぷっくる	宮崎県宮崎市	重信 美香
ひまわりの会	鹿児島県出水市	下村 佳代子
朗読サークル New 杜の声	沖縄県沖縄市	石川 里代子
穆園おはなしの会		
読書ボランティアグループ「虹色のゆめ」		
沖縄市立図書館 読み聞かせボランティア ゆいゆい		

（以上35グループ）

推薦された優良読書グループには、その業績を讃え、公益社団法人 読書推進運動協議会より賞状および副賞（図書カード2万円分）を、各道府県読書推進運動協議会を通じて贈呈いたしました。各グループの活動状況は、1月号以降、本紙上で逐次紹介していきます。

この優良読書グループ表彰は、1968年 第22回「読書週間」から実施しており、本年までの表彰グループ数は2020グループとなります。

なお、副賞の図書カード2万円分のうち1万円分は、例年同様、日本図書普及株式会社の協賛により寄贈されたものです。同社のご協力に厚くお礼申しあげます。

●全国優良読書グループ表彰のグループへは、今後5年間、本紙『読書推進運動』をお送りいたします。

■「絵本ワールドin京葉」

今年も学生たちが躍動！ 多彩なプログラムで盛りあがる

10月11日(土)、13日(日)の両日、東京都千代田区の城西国際大学紀尾井町キャンパス1号棟を会場として「絵本ワールドin京葉2025」が開催された。11月8日(土)、9日(日)に同大学とうがねキャンパスで開催される後半とあわせて「絵本ワールドin京葉」を構成している。

絵本による教育と地域への貢献を開催の目的とし、城西国際大学のメディア情報学部と福祉総合学部の学生が中心になって運営を担当しており、学生が選書した絵本・児童書を「大学特別価格」で販売もしている。

販売コーナーもにぎわいを見せました

絵本・児童書の販売のほか、学生たちによる多彩なコンテンツが展開された。おはなし会や読みきかせはもちろんのこと、紙ひこうき作りやしかけ絵本作りのワークショップ、また都心の大学らしく、学生たちがSDGsに特化したファッションブランドを立ち上げ、その販売も行われていた。

2日目には、「ミュージシャン&マジシャン&翻訳家」の大友剛さんによる「絵本とマジックのふしぎなコンサート」を開催。音楽とマジックと読み聞かせを組みあわせたパフォーマンスが披露された。

初日のオープニングでは、地元千代田区の小学生たちが登場。朗読劇『スーホの白い馬』で、モンゴルの民族楽器、馬頭琴にまつわる物語を熱演した。また音階にあわせて切った真鍮のパイプを落として演奏する、新しい楽器「バンジーチャイム」による演奏にもチャレンジ。にぎやかな音色で会場をわかせていた。

■図書館・出版社・書店の情報交換会

「みんなで読書のタネをまく」 山梨県の取り組みを紹介

10月17日(金)、東京都千代田区の千代田区立日比谷図書文化館にて、「千代田図書館・出版情報交換会『一歩、一歩、歩み続けよう!!―〝はじめの一歩〟で終わらせないために』」（主催＝千代田区立千代田図書館）が開催された。

この情報交換会ではこれまでに、出版社による図書館の欠本調査、図書館での図書販売の可能性などを提案、報告してきた。今回は、図書館・書店・出版社による連携事業のモデルケースとして、山梨県の「やまなし読書活動促進事業」（以下、「やま読」）のこれまでの成果と現状を山梨県立図書館の丸山直也さんが発表した。

山梨県立図書館は、2012年に甲府駅前に移転し、館長に作家の阿刀田高さんを迎えた（現在の館長は金田一秀穂さん）。阿刀田さんの「本屋は地域の文化機関。山梨も図書館と一緒に（書店も）活性化していければよい」の考えから、2014年「家族や友人、親しい人などに本を送る習慣を広め、県民一人ひとりの読書への関心を高め、読書週間を確立することにより、読書活動の推進を図る事業」＝「やま読」を開始した。

事業の柱となる「贈りたい本大賞」は、「大切な人に贈りたい一冊」と推薦文を募集、優秀作を表彰し、受賞作品を県立図書館で展示、県内書店での受賞作フェアを行う。

作家を招いての講演会・トークショーの会場では「やま読」参加書店が書籍販売を行い、サイン会も開催される。山梨のワインを楽しみながらの作家と読者の交流会「ワインと本と作者と」も人気だ。

2016年からは、「知の回遊」をテーマに「やま読ラリー」を秋に開催。参加書店（3店）・図書館（1館）をめぐってスタンプを集めると、甲州印伝のしおりがもらえる。近隣書店がない地域は、別日であれば同一書店のスタンプも集計されるなどの配慮もある。

そのほか、県内公共図書館・学校図書館・書店が一斉に統一テーマでジャンルの異なる本を紹介する「やま読ブックフェア」や、県内図書館員が選ぶ「こどもにすすめたい本」リストを書店も活用するなど、本に関する情報の共有にも取り組んでいる。また、山梨英和大学、都留文科大学の学生サークルがサポーターとして「やま読」に参加し、新たな盛りあがりを見せているという。

「やま読を全国に広めたい！」と その魅力を語る丸山直也さん

予算の縮小、行政・図書館側の事業継承など直面する問題も多いが、丸山さんは「大学と公共図書館、大学と書店、公共図書館と書店、書店同士など、多様な連携が生まれ、相手を知ることができた。県内に『やま読』の理解者が増え、観光協会が本と観光を融合したイベントを主催するなどの広がりもある。この発表を聞いて、『やま読』みたいなことを始めたいと思った方は、ぜひ、この取り組みを広めてください」と締めくくった。

■親地連 全国交流集会

読書の喜びを通じ、子どもは自分の物語を育てる土壌をはぐくむ

10月4日(土)、東京都渋谷区の国立オリンピック記念青少年総合センターで、「親子読書地域文庫全国連絡会 第25回 全国交流集会『すべての子どもに読書の喜びを！ 平和をあきらめない！ 子どもたちの未来のために』」が開催された。

記念講演は朽木祥さん（児童文学作家）の「『歌い出したいような明日』を子どもたちに」。朽木さんは、「親地連のテーマ『すべての子どもに読書の喜びを』を見るたびに、うれしくなります。本を読む喜びが私をどれだけ豊かにしてくれたか。心が喜ぶ1冊を子どもに与えることは必要なこと。そんな本を創りたいが、ハードルが高いです」と、執筆への思いや、創作にあたっては、児童文学で記憶を伝える意義を大切にしていると語った。また、「過去を学ぶ必要性、歴史的な理解、歴史と現代をリンクさせる」ドイツの平和教育を紹介し、「無知という土壌は、差別、偏見が育つ。土壌を豊かにする、信頼できる知識を読書で得てほしい」とも述べ、「児童文学の特性は、物語の中で希望や夢を、幸福な約束を書けること。ダイレクトに希望は書けないが、子どもが自分の物語を育てる礎となって、平和を希求する力につなぐことで希望となります」と締めくくった。

その後、参加者たちは「読書ボランティア」「子どもの人権」「平和」「学校図書館」の4つの分科会で、実践と意見を交換。閉会式では各分科会の報告と、アピール文（下記）の朗読と採択が行われた。

創作、児童文学への思いを語る朽木祥さん

親子読書地域文庫全国連絡会 第25回 全国交流集会　アピール

すべての子どもに読書のよろこびを！ 平和をあきらめない！ 子どもたちの未来のために

今年は、戦後80年という節目の年です。私たちは毎年、非戦の誓いを確認しあってきました。それは、誰もが自由と平和を享受し、自分らしく生きていくことのできる社会の実現を、これから生きていく子どもたちのために強く願うからです。

しかし、今や世界中のあちこちで理不尽で理由のない軍事侵攻や武力衝突が起き、毎日大勢の人々や子どもたちが犠牲になっています。そして解決の見通しが見えないまま日が過ぎていきます。世界も日本も、分断と憎悪に覆われてしまったかのようです。そればかりか地球そのものも、待ったなしで進行する気候変動が、自然災害の甚大さを見せつけています。

この混迷を深める時代にあって、私たちは読書の豊かさを再認識し、新しい展望を見いだしたいと考えます。そしてそれらを次の世代に手渡すことが、私たちの大切な役割であると思います。

今日この会場にお集まりになられた皆さまとともに、それぞれが見つけた希望をしっかりと確認し、全国の仲間たちや一緒に繋がっている人たちと共有していきましょう。朽木さんのお話にある「歌い出したいような明日」を子どもたちとともに、私たちもつかみとりましょう。

私たちは諦めません。平和な世界を次の世代に間違いなく手渡すことを。

これからもさまざまな場所で、さまざまな方法で、考え行動していきましょう。

2025年10月4日

親子読書地域文庫全国連絡会　第25回全国交流集会実行委員会

来年以降の年賀状について

このたび、公益社団法人 読書推進運動協議会は、各法人・団体さま、図書館さまをはじめとする各施設さまへ、これまで年始のごあいさつにお届けしておりました年賀状を、控えさせていただくこととといたしました。まことに恐縮ではございますが、ご理解賜りますとともに、今後も変わらぬご厚誼のほどをお願い申しあげます。

読書推進運動協議会
X（旧 Twitter）

■日本出版クラブ震災対策室 レポート

能登の置き本 本から見える被災地の人々の想い

日本出版クラブ震災対策室運営委員
特定非営利活動法人 エファジャパン プログラムマネジャー
鎌倉幸子

2024年元日に発生した能登半島地震は、石川県能登地方に甚大な被害をもたらしました。住宅や道路などの生活基盤はもちろん、図書館や地域の書店といった文化を支える場も大きな損壊を受けました。住民の多くが家を失い、避難所や仮設住宅での生活を余儀なくされる中、本を手に取ることができない日々が続きました。

こうした状況の中、立ち上がったのが「能登の置き本」プロジェクトです。本を届けることで被災地の読書環境を途切れさせず、人々の居場所を作り、同時に地元の書店を支援するという3つの目的をあわせ持った取り組みです。

「能登の置き本」事業の経緯

「仮設住宅の設置が進んでいます。その中には集会場も置く予定です。でも、そこで暮らす人たちが部屋に引きこもり、外に出ないのではないかと心配しています。孤立・孤独を生み出さないようにするにはどうすればいいのか」

2024年7月に能登半島視察の際に訪問した珠洲市役所での泉谷満寿裕市長のことばです。

珠洲市では仮設住宅の建設が遅れた地域があり、待ちきれない人は完成した他の地区の仮設住宅に入居するケースが見られました。同じ仮設住宅に移ったとしても「震災前の向こう三軒両隣」がそのままの形で入居できるわけではありません。

知らない人同士が集まり、ゼロから新しいコミュニティをつくる必要がありました。「仮設住宅の集会場に本棚を置けば、住民が外に出るきっかけになるのではないか」泉谷市長はそう語りながら、なにかを思いついたような表情をこちらに向けました。

その結果生まれたのが「能登の置き本」でした。「能登の置き本」は「置き薬」からきています。置き薬は、自宅に薬箱を置き、使った分の薬代のみを後払いする江戸時代から続く販売方法です。配置員が定期的に訪問して薬を補充し、使用履歴や健康状態の相談に応じて薬を追加する仕組みです。

「能登の置き本」も一度本棚を設置し、本を配布するだけではなく、リクエストを受けて、いま読みたい本、生活再建のために必要な本などを聞き取りながら、定期的に本の追加をしています。

支援の仕組み

能登の置き本は、仮設住宅や公民館に本棚ごと届けられます。絵本、小説、漫画、実用書など、はば広い世代が楽しめるように選書されています。年に4回、1回につき30冊を追加していきます。

珠洲市と輪島市を結ぶ国道249号の様子
（2025年1月12日）

設置箇所については市役所・町役場の担当者との協議を重ねました。珠洲市では当初仮設住宅への設置を予定していましたが、「仮設住宅で暮らしている人も、家が残った人も、両者が通い、コミュニケーションが取れる場所」として公民館にしました。

特徴的なのは、出版社からの寄贈だけではなく、図書の約3割を被災地の書店から購入する仕組みです。単に本を渡すだけでなく、被災した地域書店の経営を支え、出版流通の循環を保つ狙いがあります。たとえば、珠洲市の「いろは書店」は店舗を失いながらも仮設店舗で営業を再開し、地域に本を届け続けています。また輪島市の「大下書店」、穴水町の「コメリ書房」、能登町の「ブックス千間」、七尾市の「きくざわ書店」は、「地域の読書文化を絶やしてはならない」という思いを共有する能登の置き本事業の重要なパートナーです。

各設置場所にはリクエストノートが置かれています。住民が読みたい本を自由に書き込み、その声を反映して本が追加・入れ替えされる仕組みです。一方通行ではなく、住民の声に耳を傾けながら進めるのが、このプロジェクトの大きな強みといえます。

設置の広がりと利用の様子

珠洲市での設置作業を予定していた2024年9月に奥能登豪雨災害が発生。珠洲市と輪島市ではまた土砂が町を襲いました。「地震から半年以上が経ち、これからだと思っていたが、豪雨で心が折れた」という声が聞こえてきました。

緊急救援の事業は震災直後に現地入りすることが重要と思われがちです。しかし地盤が緩んだ被災地では数か月後に別の災害が起きることもあります。震災直後よりも、遅々として進まない復興、長期化に渡る避難所・仮設住宅での生活に強いストレスを抱える人たちも増えてくるタイミングがあります。息の長い活動が必要です。

能登の置き本は2024年11月、まず珠洲市の10地区に設置されました。その後、輪島市、七尾市、穴水町、能登町へと拡大し、2025年初頭までに5市町35か所での設置が完了しました。

- 珠洲市（10か所）
- 輪島市（7か所）
- 能登町（6か所）
- 穴水町（6か所）
- 七尾市（6か所）

能登の置き本の管理は自治会や公民館にお任せしています。本の貸出の有無、本の管理の仕方は各設置場所の自治に任せています。

地域によって人気の本も異なり、漁業が盛んな地区では海や自然に関する本、農業地域では園芸や野菜づくりの本が求められるなど、生活や文化が読書の傾向に反映されています。

本から見える被災地の人々の想い

能登の置き本のモニタリングを続けていると、「本がほしい」という一言の中に、驚くほど多様な願いが込められていることに気づかされます。

住まいを失い、新しい日常を始めた人びとが求める本について語る、その声をたどると、いまなにに悩んでいるのか、どのような未来を描きたいのかが見えてきます。

【左】置き本の本を使った折り紙教室も開催
【右】日置公民館（珠洲市）に設置された置き本

■自分のやりたいことを思い出した

「全壊した家から取り出せたものはかぎ編みの棒と毛糸だけだった」そう語ってくれたのは珠洲市の仮設住宅で暮らす80代の女性。でも前向きな気持ちになれず、かぎ編みの棒も毛糸も、仮設住宅の隅っこに置いたままだったそうです。「編みものの本を見つけて、やりたいことを思い出すきっかけになった」と喜んでおられました。

■人のことばに励まされたい

穴水町の仮設住宅では「人の生き方の本が読みたい」という声がありました。特に人のことばを集めた本に関心が寄せられ、困難な時期を乗り越えるために、他者の経験や生きざまから勇気を得たいという気持ちが感じられます。同じ場所では、物語や詩にふれたいという声も多く聞かれました。

■みんなで季節の歌を歌い、一緒に時を刻む

仮設住宅の代表を務める方は「季節感が大切」と、童謡や季節ごとの歌集を求めていました。歌をきっかけに集まることで、住民同士が自然と声をかけあい、絆を育んでいる様子が印象的でした。

■娯楽だけではない避難所で会話を生み出す漫画の力

輪島市では漫画へのリクエストが目立ちました。「漫画を全巻一気に読みたい」という声は各地で共通して聞かれました。ある公民館の職員は「地震のあと避難所にいたとき、倒壊した家の下にあった漫画を持ってきた人がいた。みんなで回し読みしたとき、そこから会話が広がった」と教えてくれました。漫画は娯楽であると同時に、人と人をつなぐコミュニケーションの糸口にもなっています。

また「隙間時間に読める本があるとよい」という要望も多くありました。写真集や軽いエッセイなどは、ちょっとした合間に心をほぐす存在です。被災生活の緊張を和らげる小さな時間が、本によって生まれることがわかります。

■暮らしを支える実用書

珠洲市では料理本や園芸本、手芸の本など、暮らしを支える実用書の希望が目立ちました。特に「パッチワーク」「着物のリメイク」「布小物づくり」といった要望は、この地域の歴史と深く結びついています。かつて縫製工場があった地域では「簡単な手芸本ではもの足りない。むずかしい本があるとやりがいになる」という声もあり、置き本が生活の再建と文化の継承を両立させる存在になっていることがうかがえました。

■シリーズで連続性を取り戻す

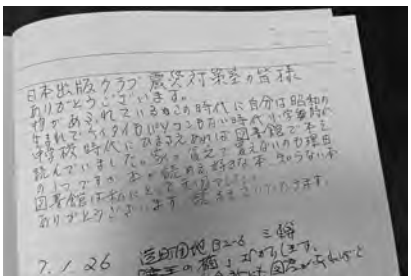
子どもたちからは『かいけつゾロリ』『Dr.STONE』『名探偵コナン』など、具体的なシリーズの続きが求められています。物語の続きを読むことは、震災前からの暮らしの連続性を取り戻すことにつながります。また、被災生活の中でも「自分の好きな世界にふれたい」という思いは変わらないのだと感じます。

「本がたくさんあると逆に迷ってしまうけれど、この本棚の規模がちょうどいい」と語ってくれた住民がいました。限られた冊数だからこそ、一冊一冊が生活に深く入り込み、読書の楽しみを再び呼び起こしているのです。

本がつなぐ未来へ

能登の置き本は、被災地に本を届ける活動であると同時に、人と人との関係や地域の文化を支え直す営みでもあります。仮設住宅や公民館に並ぶ本棚は、単なる支援物資ではなく、暮らしを取り戻し未来へ歩み出すための「道しるべ」です。

多様なリクエストに耳を澄ませるたび、本には人を励まし、楽しませ、結びつける力があることをあらためて実感します。能登の置き本が示す読書ニーズの広がりは、その力の確かさを物語っているようです。



穴水町仮設住宅に設置された
リクエストノート

「能登の置き本」は、本を届ける支援であると同時に、地域の出版文化を守り、人と人をつなぐ取り組みです。本を通じて会話が生まれ、孤立を防ぎ、新しいコミュニティが形づくられています。

本を届けることは単に知識や娯楽を提供するためだけではなく、人々の心を支え、社会を結び直す力を持っていることを、このプロジェクトはあらためて示しています。今後も現地の声に耳を傾けながら2026年も支援を続けていく予定です。

■BOOK MEETS NEXT

全国の本屋さんをめぐるスタンプラリーも！

「本との新しい出会い、はじまる」を掲げた出版業界が一丸となって取り組む読書推進・書店振興キャンペーン「BOOK MEETS NEXT 2025『秋の読書推進月間』」が、10月25日(土)～11月23日(日祝)の期間、開催されている。

10月24日(金)には紀伊國屋ホール（東京都新宿区）でオープニングイベントとして、岩崎加根子さん（俳優）の「谷川俊太郎作品朗読」と、俵万智さん（歌人）と鈴木俊貴さん（動物言語学者）のスペシャルトーク「つなぐ言葉、羽ばたく言葉」が行われた。

また、全国の参加書店（約3000店）店頭のQRコードからスタンプを取得する「BOOKスタンプラリー」や、書店のブックカバーデザインを用いたチャームが購入できるガチャガチャの設置など、書店で楽しめる企画を展開。

茨城、東京、山梨、愛知（2開催）、東海地区、京都、大阪、兵庫（2開催）、広島、福岡では、書店や企業だけではなく、地域全体で盛りあがれるブックフェスティバルなどが開催された。なかには、12月にかけて開催されるフェスティバルもある。

参加書店、その他の企画、イベントの情報など詳細は公式サイトまで。

● BOOK MEETS NEXT 公式サイト
https://book-meets-next.com

■出版功労者顕彰会

秋の箱根で先人を偲び平和への思いを新たにする

10月27日(月)、神奈川県箱根町の出版平和堂において、第57回「出版功労者顕彰会」（主催＝日本出版クラブ出版平和堂委員会）が、多くの出版関係者の参加のもと行なわれた。出版平和堂は、出版文化の発展に尽力された先達を顕彰し功績をたたえるとともに、出版を通して平和な社会を守ることを祈念する記念碑である。今回は4名が新顕彰者として加わることとなった。版元、取次、書店それぞれの立場から大きな業績を残された方々で、顕彰者は通算で1242名を数える。

10月末の箱根としては暖かい天候にも恵まれ、深まる秋の自然のなかで黙祷、新顕彰者名奉告、献花と続き、新顕彰ご家族、関係者、役員の記念撮影まで、滞りなく会は進行した。

芦ノ湖畔の箱根ホテルに会場を移しての第二部は、顕彰者への献杯でスタート。参加した出版関係者が、テーブルを囲み、なごやかな昼食会となった。世界各地で武力による紛争が続くなか、出版界をあげて平和を希求する一日となった。

新顕彰社名の奉告ののち献花が行われた

事務局報告（10月）

・4日＝親子読書地域文庫全国連絡会 全国交流集会 出席（国立オリンピック記念青少年総合センター）
☆6日＝機関紙『読書推進運動』695号別冊 入稿
☆7日＝機関紙『読書推進運動』695号本紙 入稿
☆8日＝機関紙『読書推進運動』695号本紙・別冊 責了
・9日＝「第58回逗本装幀コンクール受賞記念『シャーロック・ホームズの護身術バリツ』グラフィックデザイナー 松田行正さんトークイベント」出席（誠品生活日本橋）
☆10日＝「第55回 野間読書推進賞」招待状 発送
・10日＝「2025 読売出版懇親会」出席（パレスホテル）
・14日＝伊藤忠記念財団「子ども文庫助成事業」書面審査終了
☆15日＝機関紙『読書推進運動』695号本紙・別冊 出来
☆15日＝「第68回 こどもの読書週間」「第80回 読書週間」標語募集開始
・15日＝「学校図書館整備推進会議」運営委員会出席
☆17日＝「第55回 野間読書推進賞」要項 入稿
・17日＝「千代田図書館・出版情報交換会」出席（日比谷図書文化館）
☆22日＝「2026 若い人に贈る読書のすすめ」掲載書目決定
☆23日＝「第67回 こどもの読書週間」について後援団体に事業報告送付
・27日＝「出版平和堂 第57回 出版功労者顕彰会」出席
☆28日＝**第3回 常務理事会** 開催
☆29日＝「第79回 読書週間」ポスター イラスト応募作品 返却完了
☆30日＝「第55回 野間読書推進賞」について出版クラブと運営うちあわせ
・30日＝「講談社メディアカンファレンス2025」出席（東京會舘）

●編集部&事務局のひ・と・こ・と

●10月27日の朝から「読書週間」期間中毎日、今年も読書週間に関する図書館・書店などのX（旧Twitter）の投稿を検索しては、再投稿していました。かなりの分量でしたので、疲れ目肩こりが通常の倍（自分比）となっています。ポスターを展示した写真を投稿してくれた図書館・書店も多く、清々しく澄み切った色のポスターが疲れ目を癒してくれました。「読書週間」終了後も、ポスターを愛でていただければ幸いです。

●今年の標語「こころとあたまの、深呼吸。」が秋の木立を連想させたのか、「うちの公園にも読書にぴったりの場所があります」という投稿もあり、標語への注目度をあらためて感じました。

●大学図書館からはおすすめ本の展示だけではなく、しおりプレゼントやスタンプラリーで学生に図書館利用を呼びかける投稿も目につきました。「読書週間」イベントがうれしい反面、学生の読書離れが進んでいるのでは？と心配にもなります。ぜひ、近日発行の「若い人に贈る読書のすすめ」リーフレットもご活用ください。

●そのほか、再投稿は控えましたが、個人からの投稿には、「読書週間」のきっかけ「読書の力で平和な文化国家を」をご紹介くださるものも多く、国内外で格差と分断が広がる現状を本の力で乗り越えたいという思いが伝わってきました。ゆっくり深呼吸して、いま一度、「読書の力で平和」を希求しませんか？　（伸）